

トルコにおける親日観の源流

小松 香織

はじめに

われわれ日本人は「中東」についてどのようなイメージを持っているのであろうか。「中東」と言われて思い浮かぶのは、イスラエルを除けばそこに住まう人々の大半はムスリム（イスラム教徒）であり、戦争・地域紛争が絶えず、アルカーイダやISといった過激なイスラム集団によるテロの温床といったところではないだろうか。トルコもまたそうした中東の国々の一つである。ただし、サウジアラビアやエジプトなどのアラブ諸国やシーア派の大国イランとは異なり、600年余にわたって中東・バルカン地域に君臨したオスマン帝国の後継とはいえ、1923年の建国以来、世俗主義を国是として、イスラムと現実の政治を切り離して西洋モデルの近代国家を作り上げた。しかし、近年はイスラム色の強い公正発展党政権の下でイスラム国家への回帰が進んでいる。2020年にはユネスコの世界遺産であるアヤ＝ソフィアに対してモスクとしての利用を再開して話題となった。そのトルコが実は世界有数の親日国であることを、どれだけの日本人が知っているだろうか。

2011年にBBCが行った世界各国の人々が互いに相手に対してどの程度の好感を抱いているかについてのアンケート¹によれば、トルコ人が最も好感を持っているのは日本人である。実に64%の人が日本人を好きだと答えている。ちなみに、アメリカに対して好感を持つ人の割合は35%、EUに対しては47%である。このアンケートに限らず筆者の知る限り、トルコではこれに類似する調査において、日本は常に好きな国のベスト3に入っている。このような親日観はいかなる理由によるのだろうか。

近年夙に人口に膾炙するようになったかに見えるのが「エルトゥールル号とテヘラン空港の美談」である。「エルトゥールル号」というオスマン帝国の軍艦の物語は、日本とトルコの友好のシンボルとして長く語り継がれ、もはやレジェンドと化したと言っても過言ではない。エルトゥールル号は、1889（明治22）年7月14日にイスタンブルを出航し、11ヶ月に及ぶ長い航海の末、翌年（1890年）6月に日本に到着した。6月13日司令官オスマン・パシヤが明治天皇に拝謁してスルタン・アブデュルハミト2世の親書を奉呈し、無事その役目を果たしたかに見えた。ところが帰路9月16日夜半から17日早朝にかけて熊野灘で台風に遭遇し、座礁・沈没した。600人余りの乗組員のうち生存者はわずか69人という海難事故となった。その救難活動、慰霊、義捐金の募集、日本

の軍艦による生存者の母国送還などを通じて日本とトルコ（当時はオスマン帝国）との友好関係が始まったとされる。エルトゥールル号物語はさらにテヘラン空港の日本人救出劇へとつながる。1985年イラン・イラク戦争中にテヘラン空港に取り残された日本人をトルコ航空機が迎えに行き、全員無事にイスタンブールに連れ帰ったのである²。トルコ側が危険を顧みずこのような救援活動を敢行したのは「エルトゥールル号の恩返し」であったという感動の物語がここに完結し、以後ことあるごとに日土友好の美談として語られ続けることとなる。2015年にはこの物語を題材とする日本・トルコのコラボ映画『海難1890』も作られた。

しかし、筆者はトルコ人の親日観の淵源を求めるなら、エルトゥールル号物語ではなく、日露戦争とその影響下で出版された著作を紐解くべきであると考え。小論では、トルコ人の親日観について、それが形成されていく過程とそれはどのようなものかを明らかにする。まず、オスマン帝国とロシアとの関係から日露戦争の影響を考察し、次に、トルコ（オスマン帝国・トルコ共和国）で出版された日本関係のおもな著作とそこに読み取れるトルコ人の日本・日本人観を検討し、親日観の歴史的背景を探る。なお、引用文は「 」で括り、直後の（ ）内の数字は出典の頁、その中の……は文章を省略した箇所、[]で囲んだ部分は筆者が補ったことを示す。

I. 日露戦争の影響

1. オスマン帝国とロシア

日露戦争のオスマン帝国の人々への影響を語る前に、その歴史的な背景として、オスマン帝国とロシアとの関係を見て行きたい。「ロシアの脅威」は17世紀末に遡る。1682年に即位したピョートル1世（在位1682-1725）の西欧化政策によって「北の大国」に成長したロシアは、歴代ツァーの凍結港の確保とコンスタンティノープルの征服という野望の下で南下政策をとり、これを阻止しようとするオスマン帝国との間で露土戦争が繰り返された。

1699年ロシアはカルロヴィッツ条約に戦勝国（神聖同盟）の一員として参加し、翌1700年オスマン帝国にアゾフの割譲を認めさせた。1711年ピョートル1世はプルートの戦いに敗れてアゾフを返還するも、1762年に即位したエカテリーナ2世（在位1762-96）によって南下政策に拍車がかかる。1768-74年の露土戦争の結果、1774年のキュチュクカイナルジャ条約においてオスマン帝国はクリム・ハン国への宗主権を喪失し、ロシアに対して黒海北岸の割譲、黒海での自由航行権、オスマン帝国内正教徒の保護権を認めた。1783年ロシアはクリム・ハン国を併合、1787-92年露土戦争後のヤッシー条約でオスマン帝国はロシアにクリミア半島を割譲した。ロシアがワラキア・モルダヴィアに侵攻して勃発した1806-12年の露土戦争に敗れたオスマン帝国は、ブカレスト条約でロシアにベッサラビアを割譲した。1826年のアッケルマン条約では、セルビア、ワラキア、モルダヴィア問題でロシアの主張を受け入れ、オスマン帝国内諸港でのロシア船の通商権を認めた。1827年のナヴァリノの海戦では英・露・仏の連合艦隊がオスマン・エジプト艦隊を殲滅した。1828-29年の露土戦争後のエディルネ条約では、ロシア船に海峡自由通航権、ロシア商人に自由通商権を認

め、ドナウ川河口・東アナトリアの一部を割譲した。

このように、18世紀末以後オスマン帝国は対ロシア戦争で敗北を重ね、そのたびに領土や利権がロシアの手に渡った。唯一の例外はクリミア戦争（1853-56）であったが、それはオスマン帝国が単独ではなく英・仏と共に戦ったからにすぎない。1877-78年の露土戦争では、ついにロシア軍は帝都イスタンブルの門前に迫り、オスマン帝国は降伏を余儀なくされた。その結果、サン・ステファノ条約で、ロシアを後ろ盾とするバルカン諸国の独立・自治を承認せざるを得ず、バルカン領の大半を失った上に、ロシアに多額の賠償金の支払いと東部アナトリア諸州の割譲を認めたのである。つまり、日露戦争当時オスマン帝国にとってロシアは「不倶戴天の敵」であった。そこで、次節では日露戦争がオスマン帝国の人々に与えたインパクトを見てみよう。

2. 日露戦争のオスマン帝国への影響

本節では、日露戦争のオスマン帝国への影響について、オスマン帝国を訪れた日本人が語る「トルコ人の対日感情」を紹介し、このような親日感情の原因は日露戦争にあることを、オスマン帝国史の研究者の言説から確認する。

まず、オスマン帝国を訪れた3人の日本人の証言を取り上げる。一人目は山田寅次郎（1866-1957）である。山田は、エルトゥールル号の犠牲者のために日本で集めた義援金を携えて1892年にイスタンブルに赴いた。そのまま約22年間にわたってかの地に滞在し、日本商品店を経営する傍ら、民間人ながら当時国交の無かった日本とオスマン帝国との橋渡し役を務めた。彼は著書『トルコ画観』³において次のように語っている。

「日露戦争起るや、土国上下の我に対する情誼は、実に誠款敦厚を極め、皇帝陛下は直に陸軍少将ベルテップパシヤを派して我に従軍せしめ、日夕其報導を奏せしめ、国民は我が赤十字社及び新聞社等に金円を寄託し、戦役負傷者等を慰問せるもの陸続たり。予は日清戦争、北清事変、日露戦争の当時を通じて土国に在りしが、新聞紙上其他に於て我が国の武勇義侠両つながら他邦に卓絶せるものあるを嘆賞し、併せてオトマン帝国の祖先も亦同じく亜細亜人種なるを談り、以て日本人を敬慕する事殊に深く、上帝室より下一般人民に至るまで吾人歓待すること他に比すべきなし。予は亦召されて皇帝陛下に謁見の榮を得たること前後三回、居常悠々身の異域万里に在るを忘れ、終に土国を以て第二の故郷と思惟するに至れるもの、決して偶然にあらざるなり。」⁴

次は明治の文豪徳富健次郎（蘆花）（1868-1927）の証言である。彼は1906年にイスタンブルを訪問し、旅行記『巡礼紀行』⁵の中で次のように述べている。

「土耳其人の日本人に対する即今の態度は唯一也。己が深怨ある露西亜に勝ちて呉し日本、終始己を窘め窘めする西洋白哲人の鼻を折りし同じ東洋人の日本、是れ彼等の日本観也。」⁶

3人目は稲畑勝太郎（1862-1949）である⁷。稲畑は「日土貿易協会」の創設者で両国の民間経済外交の立役者であった。彼はトルコ人について以下のように語っている。

「亜細亜人種であると考えて日本人に対しては欧州人に対するのと全然違った態度で極く親しく腹の中を何でも言っておける。日露戦争前に土耳其と露西亜と戦争をした。そして土耳其は露西亜に対して怨みを持っていたのを計らずも日本が仇を討ってやった。そう言う訳で我が亜細亜人種のために気炎を吐くものは日本人だ、今まで日本と言う国は余り認めて居らなかった。けれども露西亜を討ってから或種の意味に於いて大変日本を尊敬し出して夫れ以来日本に対して好意を有って居ります。」⁸

3人は異口同音に、オスマン帝国を訪ねた日本人に対するかの地の人々の厚情は日露戦争の勝利に起因すると述べている。このことはオスマン史研究者の言説からも確認することができる。

トルコ人研究者 E.Z. カラルは、著書『オスマン帝国史』において「日露戦争後日本の勝利はトルコもロシアに勝つことができるという考えを呼び起こした」⁹と述べている。トルコ近代史家として名高い B. ルイスも『近代トルコの誕生』の中で「日本がロシアを破り近代化を急速に成し遂げたことは、政治・経済的見地から、ヨーロッパ列強の圧力を受けていたトルコで国家主義と近代化思想を重視する理由となった」¹⁰とする。高橋忠久は、日露戦争後に日本を紹介する多くの本、論文が出たことを指摘する¹¹。

日露戦争を契機に日本への関心が高まると、トルコ人はさらに一歩進んで日本の成功に学ぶべきであるとの考えを抱くようになる。トルコ共和国史を専門とする Y.H. バユルは、当時の人々が、「我々はヨーロッパの変形ではない。そうなりたくはない。ヨーロッパ人の科学の進歩は否定できない。我々も日本人のようにヨーロッパ人の進歩に習い、ただその一部を自国で採用するところを見たいものだ」¹²と考えたと指摘しており、同じく F. アフマドも「青年トルコ人は自分達を中東の日本とみなしていた。また青年トルコ人は近代化のためにヨーロッパ人の専門家に代わり日本人の専門家を考えていたようだ」¹³と述べている。

以上のように日露戦争のオスマン社会に与えた影響については多くの研究者が指摘するところである。一方、同時代のオスマン人の言説もこれを裏付ける。例えば、トルコ・ナショナリズムの生みの親ズィヤ・ギョカルプ (Ziya Gökalp, 1876-1924) は、「日本人はその宗教と国家を護持するという条件で西欧文明を受け入れた。このおかげで、すべてにおいてヨーロッパ人に追いついた。日本人はこうすることによって宗教、民族文化の何ものも失わなかった。……我々もトルコ人であることイスラム教徒であることを護持することを条件に、西欧文明を受け入れようではないか」¹⁴と呼びかけた。また、オスマン帝国末期からトルコ共和国初期に活躍した女流作家ハリデ・エディプ (Halide Edip, 1882-1964) も、『回想録』¹⁵の中で「当時の有名な詩人アフメト・アキフ・エルソイ¹⁶は日本人を讃える詩を作った」とし、子供にトーゴと名付けたと語っている。

日露戦争の勝利に起因する親日観の創生という現象は単にトルコ人の間にとどまらず、当時西欧列強の圧迫、植民地支配に苦しんでいた中東イスラム世界に共通するものであったことも事実である。同時代人であり、後述するように日本旅行記を著したアブデュルレシト・イブラヒムは、大隈重信に「日本人は突然太陽のごとく現れ、最初の一撃でその実力を世界に証明した。ヨーロッパ

外交筋も従来東洋に抱いていた偏見，侮りから今までとってきた政策を変更することは間違いない¹⁷と語っている。B. ルイスも、「日露戦争の結果はトルコとイスラム世界に比類無き影響を与えた。イスラム教徒は日本の勝利で，東洋人の西洋人への勝利がありうるという例を見てからというもの，目をこの勝利の獲得の原因に転じた」¹⁸とし，杉田英明は「日露戦争の前後には，他のアジア諸国におけると同様，中東においてもきわめて親日的な雰囲気の人々のあいだに醸成された。それは，ロシアがヨーロッパの一部をなす抑圧勢力であるのに対し，日本は同じ東洋に属する新興の被抑圧民族と考えられたからである」と述べている¹⁹。

このように，日露戦争はオスマン帝国をはじめ中東イスラム世界に多大なインパクトを与えたのであった。

II. トルコ人の日本人観

日露戦争後，オスマン帝国内で，特に帝都イスタンブールの出版界において「日本ブーム」とでも呼べる現象が見られた。日本に関する著作が次々と出版されたのである。本章では，これらの著作から，当時の人々が日本および日本人に対してどのようなイメージを持ち，いかなる感情を抱いていたのかを見ていく。まず，時系列でそれぞれの著作の内容を紹介し，次に，特に注目すべき著作として，イスラム世界に広く知られたアブデュルレシト・イブラヒムの日本旅行記と，観戦武官として日露戦争を直接目撃したオスマン帝国軍人で，青年トルコ人やトルコ革命に思想的影響を与えたペルテヴ・パシヤの一連の日本関係書を読んでいくことにしたい。

1. オスマン人の著作にみる日本人観の系譜

オスマン帝国における日本および日本人に関する著作は，先述のように殆どが日露戦争後のものであるが，日露戦争以前にもいくつか日本関係の書物が出版されている。確認できる範囲で最初の日本紹介本は1890年にイスタンブールで刊行されたメフメト・ゼキの『日本の過去・現在・未来』（Mehmed Zeki, *Japonya'nın Mazîsi, Hâli, İstikbâli*, İstanbul, Mahmud Bey Matbaası, 1308 (1890/91)²⁰）である。同書はフランス人の日本見聞記の翻訳で，日本の歴史，地理，社会について述べ，統計的な数字は1889年のものが使われている。翻訳書ではあるが，ところどころに訳者の所感が織り込まれているので，その部分からメフメト・ゼキの日本人観を垣間見ることができる。

「日本人がヨーロッパとの交易，そしてヨーロッパの産業，文化に出会ったこの23年の間に実現した物質的發展は驚くべきものがある。……オスマン人も，こちらから〔日本人との〕関係を樹立し，強化することを重視するならば，……間違いなく4000万の活動的で，賢明な，進歩的な信仰兄弟が得られる。」(7)

「日本人の特性は品行の良さと清潔さである。……この二つはどこの民族でも上流階級にはそなわっているが，庶民にあるのは日本だけである。」(92)

「優れた道徳，温厚・平静な性格，中庸…… [日本人が] われらが高き [イスラムの] 道徳を受け入れる素質を大いに持っていることは，彼らのすばらしい道徳から推測される……日本人も国家の利益のためにあらゆる宗教を受け入れることに決して躊躇しないであろう。……日本の国益に資する正しい，安全な道があるとすれば，それはイスラムにほかならない。」(101-106)

オスマン人の実体験に基づく日本旅行記の嚆矢と推定されるのが，1894年に書かれたムスタファ・ビン・ムスタファ（アクサライル・ハジ・ムスタファ）『極東漫遊記』（Mustafa bin Mustafa, *Aksâ-yı Şarkta Bir Cevlân, İstanbul, 1312 (1894)*）である。著者はオスマン帝国の高級官僚で，1893年内務省の命により極東へ赴いた。日本には2ヶ月余り滞在し横浜，東京，神戸，京都，長崎などの都市を訪れ，帰国後に表題作を出版した。その中で日本について，市街地は大変よく整備されており清潔である。海外へ専門家を派遣し，役に立ちそうな技術を導入している。日本人は極めつきの勤勉さと明晰な頭脳により短期間に目覚ましい発展を成し遂げた。特定の信仰は無いので，イスラムの伝道師を送れば，次々に改宗するであろう。ムスリムとなったあかつきには政策に役立て，他の国々が長年努力しても手にすることのできなかった多くのものを獲得することは確実である，と述べている。ただ，この旅行記はスルタンに献呈されたもので，刊行されていない²¹。

日露戦争中に出版された本としては，メフメト・アリフの『図説・新日本』（Mehmed Arif, *Musavver Yeni Japonya, İstanbul, Şirket-i Mürettebiye Matbaası, 1322 (1904)*）がある。本書はゼキの前掲書を参考にしたと推測され，日本の発展と最新の情報を紹介し，写真も挿入されている。目次には，地理，歴史，農業，台湾植民，北海道と屯田兵，運輸・通信，教育，陸軍，海軍，宗教，商工業などの項目が並ぶ。以下にメフメト・アリフの日本人観が表れた部分を引用する。

「日本と日本人についてできるだけ紹介したい。これほど遠くにある国の習慣・道徳，全体の状況を語るのは難しいことである。これまでの著作の中では，ゼキ・ベイが14年前に書いた『日本の過去・現在・未来』がすばらしい。しかし，この間に日本はめざましく発展した。本書では新しい日本のすべてを紹介する。日本に関する数多くの書物を参考にし，最も注目すべきものを写真も含め採用した。」(3-5)

「日本は公教育をいつも重視している。最も高貴な人から最も身分の低い人まで読み書きができることを望んでいる。日本の初等教育の発展は欧米をしのぐ。日本列島には読み書き・算術のできない者はいないほどである。ポケットに紙とペンをしのばせない日本人があるか。」(63)

「初等学校は小さな村にまで行き渡っている。」(67)

「この20年間の就学率の上昇は驚くべきものである。」(69)

「主な宗教は2つ，神道と仏教である。数多くの寺社があり多くの僧侶・神官いることから，日本人はさぞや信心深いと思いきや，そうではない。日本人の信仰，宗教に関する無頓着は最たるものである。ある日本人に宗教は何かとたずねると，しばらく返答に躊躇することは確かである。日本人には聖典というものが無く，行動を規定する道徳規範書も無い。日本人は自分

「私たちは生来道徳的であるのでそうした本は必要無いと言う。」(98)

「産業についても日本人の発展には語るべきものがある。開国以来ヨーロッパ人は不良品や余剰品を売るために新しい販路を手に入れたことに大変満足していたが、この喜びは長続きしなかった。先見の明のある日本人は、今日ではヨーロッパの現代産業のすべてを導入し、国内を工場で満ち、欧米の商人をたいそうがっかりさせている。今や日本人は必要な物資は国内で手に入れるか、輸入した原材料を国内で加工している。」(106)

日露戦争直後の最も注目すべき著作は、ナムク・エクレムの『日本人』(Namık Ekrem, *Japonlar, Hanımlara Mahsus Gazete Matbaası, İstanbul, 1322 (1904)*)である。彼はオスマン帝国における「最初の日本通」と言っても過言ではない。フランス人ボヴァール伯の日本旅行記を翻訳し1903年に『日本海域にて』(Namık Ekrem, *Japonya Sularında, İstanbul, 1903*)と題して出版した著者が、日露戦争による日本への関心の高まりに応じて続編として出した本で、日本の教育、産業(工業、農業、商業)、日本女性について紹介している。目次には、日本における初等教育、予科学校、高等学校・大学、工業、農業、商業、日本女性、結論といった項目が並ぶ。同書に見るナムク・エクレムの日本人観は以下のように要約することができる。

- 日本人は自らの資本で自らの手で近代化を成し遂げたが、その背景には、日本人の勤勉さ、まじめさ、努力と政府の適切かつ熱心な援護があった
- 日本人は独自の文化的伝統、アイデンティティを保持している
- 知育よりもまず徳育に重点を置いている
- 日本女性は良妻賢母で愛国心が強い
- 日本を含め東洋の学術水準は高い

以下に、こうした視点が具体的に記された部分を引用しつつ確認する。

まず教育(初等教育、予科、高等学校、大学)の章で、1871年に文部省が設立され、全国に西洋式の学校を建設することをめざし「宣言」²²が出されたとある。

「すべての教育の中で最も重要な位置を占めているのは道徳教育である。」(11)

「日本の一般的な学校でまず注意を引くのは、生徒の良い態度・行いである。行儀の悪い子供はいかに頭がよく勤勉であっても許されない。」(13)

「日本の学校では子供たちに道徳、行儀作法を教えることにより重点が置かれ、努力がなされている。たしかにこれは最も重要な問題である。一人の紳士が勤勉で頭がよいとしても、態度が立派でなくては彼から何が期待できよう。」(19-20)

「日本の大学で外国人教師の数は次第に少なくなっている。かつて東京大学には22名の外国人教師がいたが、今では5名を残すのみである。こうした状況を見れば、数年以内に一人残らずいなくなるのは疑いない。日本人の勤勉さ、向上心、教育はヨーロッパに後れをとらない。」(17-18)

「大学で学ぶ者は、君主と国家と国民のために奉仕し忠誠を尽くすために、いささかの過ちも犯さず、息をひきとる最後の瞬間まで君主と公の福祉に人生を捧げることをためらわないとい

う精神を磨かれる。」(18)

産業（工業、農業、商業）の章ではその発展の目覚ましさが讃えられる。特に日本人が外国に頼らず自らの力でこれを成し遂げたことを強調する。

「政府は産業の振興のため実に多くの奨励策をとっている。特に綿工業の発展に全力を注いでいる。とはいえ、業者たちはたとえ官の指導を受けなくても、努力と注意深さなどで外国人との競争にひけをとらない。その仕事はまじめさ、正直さからけっして離れることはない。それゆえに進歩し続けるのである。」(24)

「日本では5~10年の間に約200隻の船が作られた。蒸気船建造にたずさわった技術者、機関手はすべて日本人である。……今日日本の至る所に鉄道が敷かれている。短期間でこのような発展を遂げたことは日本人にとっても驚きである。鉄道に必要な車両は日本人がすべて自国で生産している。」(25-26)

「日本の気候は本来かならずしも農業に適しているわけではない。国土は一般に山や丘陵が多い。高原の牧草地や平野は非常に少ない。農地の面積は日本の全国土のわずかに十分の一である。しかし、日本人は生まれつき勤勉で農業に熱心な国民であるので、国土を多くの障害を克服し改善することで農地に変えていった。」(28)

「日本人は地面に植えたものの利益を一つとして見逃さない。たとえば田畑の間に麻や棉を植えて収穫する。それだけではなく、これらの繊維からすばらしい驚異的な布地を織りあげる。また、絨毯を織り、国内で消費すると同時に英米に大量に輸出している。日本製のあらゆる種類の布が外国で人気を博している。なぜなら丈夫で品質が確かだからである。」(40)

「日本で昔から最重点とされてきたのが対外貿易の拡大と進歩である。この問題であらゆる努力をしている。全貿易収入は1901年に13億フランにのぼったが、現在ではこの額を相当上回っている。最も重要な貿易中心地は横浜と大阪である。数年前大阪に巨大な港が建設された。この港には最大の外洋汽船も入ってくる。日本の貿易高はますます増えつつあるが、今では外国船の必要はまったくない。日本の海域に立ち寄った外国船は、ヨーロッパ人とアメリカ人以外乗客も積荷も見つからない。1890年に日本にはたった220隻の商船しかなかったが、今日1500隻以上が航行している。日本郵船会社という名の日本の会社だけで80隻ほどの商船を持ち、すべて外洋で運航している。つまり、ヨーロッパ、アメリカ、オーストラリア、アフリカで、日本国旗を掲げた商船がいつも整然と仕事をしているのである。」(37-38)

この本の特色の一つに日本女性への関心がある。というのも同書は『女性のための新聞』(*Hanımlara Mahsus Gazete*)という婦人誌の付録として刊行されたものだからである。エクレムによれば日本女性は一般に思考明敏で心根は高貴である。愛国心、人助け、忠誠といったいずれも一人の英雄にふさわしい美徳の精神を持っている。ゆえにオスマン女性はこれを手本とすべきであると言いたげである。

「日本の夫婦は、結婚後もずっと心から仲睦まじく愛し合う。妻は夫の命令に反する行為はけっ

してしない。とはいえ、女性は夫に多少道に外れた行為をみとめると、完璧な礼儀と丁寧さをもって助言することをためらわない。おそらく夫は妻に感謝し、よろこび、彼女をさらにもっと愛するようになる。これが家族の幸福な生活を生む。

日本には娘が花嫁修業に母親から渡される 12 か条のアドバイスのある。傾聴に値する教えであるので、以下に箇条書きにする。

1. 娘よ！ 今おまえは結婚し、別の世界に入ります。これまで父母に従ってきたように、これからは夫、舅、姑に従い、敬いなさい。
2. 夫に対して、いつでも機嫌よく、やさしく、愛情を示しなさい。
3. 行儀の悪い行いは慎み、物静かな女性らしさを守りなさい。
4. おしゃべりをしすぎたり、考え込みすぎたりしないように。
5. いつも夫の助言に耳を傾け、その命令に逆らわないように。人間ゆえにまちがいはあろうが、それが明らかになれば許しをもとめなさい。
6. もし誤りが夫の方にあっても、すぐに顔に出さないように。
7. 夫が怒っているときは余分なことを言わないように。機嫌を直し、怒りが静まるよう努力しなさい。
8. はかりごと、嘘、悪口、中傷などをしないように。
9. 遅く寝て早く起きなさい。
10. 家計をわきまえ、必要以上におしゃれをしないように。
11. 質素儉約につとめ、服装を清潔に。
12. 子供ができたなら、母としてのやさしさ、慈しみ、愛情をこめた接し方をしなさい。注意深く、繊細さを持ち、高い徳を身につけ、子供たちを立派に育てなさい。

日本の娘たちはこうしたアドバイスに強く戒められているので、いずれの家庭生活も平穏で、家族は幸せである。」(43-45)

ナームク・エクレムは結論として以下のように締め括る。

「現在、日本人はいかなる技術でもヨーロッパに後れをとることはない。」(52)

「我々は、ヨーロッパ人は隣人であるが故に、その技術的進歩をすぐに見聞する。日本人は世界の果てに出現し、絶えず働き、発見し、応用する。忍耐と努力で手に入れた発明、発見を最大限自分たちのために役立て前進し続けている。ヨーロッパ人は日本人の技術の高さを、必要性和利用の段階で理解し驚嘆する結果となる。この小さな民族は、何にでも最も容易で簡便な方法を見つけようとして成功する。彼らの成功のすばらしさを見て驚かない者があろうか。」(52-53)

オスマン帝国は、1908年のいわゆる「青年トルコ人革命」によって、30年余りに及んだスルタン・アブデュルハミト2世の専制が終焉し、立憲制が復活した。政権の中心にいた青年トルコ人（統一と進歩派）にとっても、日露戦争に勝利して西欧列強に肩を並べるに至った日本・日本人は範とすべき存在であった²³。この第二次立憲制期に出版された本を2冊紹介しよう。

一冊目はサートゥフ・ベイの『日本と日本人』（Sâtıf Bey, *Japonya ve Japonlar*, İstanbul, Kader Matbaası, Mali²⁴ 1329 (1913))である。これは1913年5月2日にイスタンブルの東洋劇場で行った講演の記録で、「日本に学ぼう」という主旨の下、タンズィマートと明治維新を比較している。日本の歴史、特に明治維新における近代化と西欧化の問題を取り上げ、その成功の理由を考察している。

「ヨーロッパとの交流・衝突の結果押しつぶされぬどころか、より強力になるという幸運は、今日までただ一つの民族に、ただ一つの国家に与えられた。その民族とは日本人、その国家とは日本である。……我々のように進歩からはるかに遅れ、ついには全速力で駆け出さねばならない民族にとって、日本人は大いなる重要性をもって検討する必要がある事例である。」(4)
 「日本人は単一民族である。……そのため日本「民族」と日本「国家」との間にせめぎあいがない。」(6)

「これほど地震、台風、火山の多い土地を持った国で、これほど多くの人間がひしめき合って生活することは、非常な勤勉さによってのみ可能となる。勤勉さは日本人の本質であるといえる。」(10)

「日本人が進歩のためにとってきた『行動』はきわめて簡潔明瞭である。日本人は進歩のために欧米を模倣した。欧米の思想、科学、教育、行政、法典を借りた。……日本を30年間で中世国家から近代国家としたこの行動は、我々にとって非常に価値のある教訓である。我々も[日本人のように]数世紀にわたってヨーロッパ文明の外にいた。我々もヨーロッパ文明を『借用し模倣する必要性』を彼らにはるかに後れをとってから気づき始めた。……我々は精神的孤立から抜け出し、ヨーロッパの進歩の分け前に与ろうと、日本人よりも30年も前に決意した。ミカドの御誓文より30年前にタンズィマートの勅令を出した。」(34-35)

「真の進歩のためにいかに行動すべきかを、日本の発展の歴史は我々に明白に示している。[それは]ヨーロッパ文明を借用し模倣するよう努力するが、[その際に]国を富ませ、知識を豊かにする政策・改革に重点を置くことである。」(36-37)

二冊目は、サーミーザーデ・スレイヤの『大日本』（Sâmizâde Süreyyâ (Erdoğan), *"Dai Nippon" Büyük Japonya*, Matbaa-i Orhaniye, İstanbul, (1917))である。ジャーナリストとしてイスタンブルの主要紙のコラムを担当するなど活躍していた著者が、1914年に日本を訪問し、帰国後自らの見聞にもとづいて日本に関する多数の論説を新聞紙上で発表し、後にそれらをまとめて出版した日本紹介の書である。後述するアブデュルレシト・イブラヒム、ベルテヴ・パシヤと同様、著者自身の見聞に基づく日本論として注目に値する。この本は第一次大戦中に出版されており、そのせいか外国の侵略の危機に直面した日本がそれを免れ、いかにして急速な発展を実現したのか、その理由を解明し、オスマン人も見習うべきであるとの趣旨で書かれている。スレイヤの日本人観は以下のように要約することができる。

- 日本人は愛国心が強い

- 自負心が強い
- 無駄に時を過ごすことをよしとしない
- 確固たる信念を持つ
- 経済に非常に関心がある
- 生活は簡素で単純明快である
- 自然を愛する

彼の言葉を引用すると、

「日本人は誰一人ヨーロッパ化しようなどとは夢にも思わなかった。彼らの唯一つの目標、願いは、自らが学問・技術を極めること、ヨーロッパから帰国後、祖国の役に立つことであった。西欧人になりたいなどという日本人は皆無であり、ありえないことであった。」(52)

彼は、日本人はなぜかくも短期間に発展することに成功したのか、という疑問を投げかけ、次のような理由を挙げてこれに答えている。

- 民族の誇りがもたらす偉大な力
- 怠惰の嫌悪（勤勉さ）
- 生来信念を持つ
- 生活は質素で虚飾を排する
- 自然を愛する
- 文明思想、近代的進歩を宗教や伝統に拘らずにすみやかに発展・普及させた
- 政府による有能な人材に対する奨励策

以上がオスマン帝国の知識人たちの著作に見るトルコ人の日本人観である。

この他にもいくつかの日本関連の書籍があるが、その多くは西欧書物からの翻訳である。とはいえ当時の出版物のすべてが現存するわけではない。むしろ失われたものの方が多いかもしれないことを考慮すれば、もっと数多くの日本・日本人論が言論界を賑わせたに違いない。そして、オスマン帝国末期に巷間に広まった親日観はトルコ共和国に受け継がれた。ここでは紙幅の関係上共和国以後の異なる時代に書かれた2冊を選んで紹介するにとどめる。

一冊目はムスタファ・ハック・アカンセルの『日本の奇跡と我々にとっての教訓』(Mustafa Hakkı Akansel, *Japon Mucizesi ve Bundan Bizim için Alınacak Dersler*, İstanbul Halk Basımevi, İstanbul, 1943)である。これは第二次世界大戦中に書かれた日本を紹介する本で、西欧人の日本体験記に基づいて書かれている。太平洋戦争の最中という時世の影響か、日本人がいかにして世界の軍事大国になったのか、その成功の理由を述べたものだが、ここにもオスマン帝国期と同様「日本に学ぼう」という姿勢がみられる。

「アジアの民族である日本人がいかに発展したかを研究することは、彼らのように短期間で発展したいと望む我々トルコ人にとって、ヨーロッパ人を研究するよりもっと重要である。」(3)

「日本人は、我々にとって、『発展の生ける見本』である。」(3)

「驚いたのは、日本では宗教が民族を殺さなかったことである。日本の国家宗教は神道である。しかし何百万という人々が仏教徒であり、何十万かはキリスト教徒であるらしい。……しかし、一人の日本人は何教徒であれ、第一に愛国者である。神道、仏教、キリスト教はその次の問題である。オスマン帝国においても何よりもまずトルコ主義が優先されていれば……」(54-55)
 「一つの民族の生命は物質性より精神性にかかっている。……わが国において400年来踏みこじられてきた精神性にトルコの指導者たちの注意を強く喚起したい。」(75)

二冊目は、イスメト・ボズダアの『これが日本モデルだ—西洋派の強制なくばトルコも日本になっていた』(İsmet Bozdağ, *İşte Japon Modeli : Batıcı'lar Zorlamasa Türkiye Japonya Olurdu, Tasvir Matbaası, İstanbul, 1985*)である。1985年、第二次世界大戦の敗北にもかかわらず急速な復興を果たし、経済大国となった日本の成功の理由を考察し、トルコのケースと比較した上で、こちらもまた日本を手本とすることを勧めている。

「日本の発展モデルとは、日本文化と経済・技術との合体、それも正しい合体である。日本は西欧から文化ではなく知識を取り入れるすべを知り、これを自らの文化の上に乗せることに成功した。言い換えれば、いくつかの文化的成果を中国から、もしくは英国から取り入れる場合、それらを自らの文化の中に融合しながら用いたのである。日本化させた以上、経済的・技術的進歩もまた、日本独特のカンパスの上に描くことを心得ていた。」(95-96)

「日本人の最大の特徴は、気に入ったものは自らの文化の中に取り込み融合すること、それに新たな形を与え、日本化することである。」(34)

「日本人の道徳とは、全て社会のためというものである。人間の自由など必要ない。自由は伝統的な規律と国家が定めた制約の範囲内で好きなことをすることである。自由の限度とは、他者の自由ではなく、社会の幸福にある。家族の中で父親の発言権が不動の強さを持つように、社会においては天皇の言葉が、問答無用に受け入れ、ただちに実行すべき法律なのである。」(87-88)

「日本人は家庭内で身に付けた階級にふさわしい生活態度・敬意・忠誠を、学校で、軍隊で、職場で、社会で継続する。一人の日本人にとって、生活のすべては責任によって紡がれた長い回廊である。日本人はこの回廊を進む時、到達すべき目標を持っている。その目標は国家が示す。」(89-90)
 「全ての日本人が生まれながらにある義務を負っている。それは『恩』と言われるものである。『恩』とは、愛、敬意、義務、責任、忠誠といったものすべてをさす。この義務には際限がない。終生終わることが無い。……『恩』と呼ばれるこの義務の父母に対するものが『孝』である。一生続く。天皇に対するものを『忠』という。」(91)

「小学校では、通知表は生徒の『知識』によってではなく、素行の得点、つまり行儀の程度によってつけられる。……日本では人は他人とではなく、自らと競う。ゆえに小学校では生徒に評点をつけない。評点とはある者を他者より優れていると判定するものである。友人に後れをとった生徒は名誉を傷つけられたことになる。このため評点をつけないのである。」(93)

「日本の小学校では、教養よりも修養を重んじる。教師は生徒を互いに競わせる前に、自己に

対する信頼の気持ちを限らないレベルに持って行く。生徒の自信は、こうしてほとんど信仰のレベルに達する。すなわち日本社会の成功の秘密はこの信仰にあるのだ。」(94)

第二次世界大戦後、高度経済成長期を経て世界第2の経済大国となった日本の姿を、トルコ人は日露戦争でオスマン帝国の大敵ロシアに一矢報いてくれた日本人に重ね合わせ、シンパシーが呼び起こされたようである。トルコに日本ブームが再来し、時流に乗って「日本の奇跡」と題する本が次々と出版されたのであった。

以上がオスマン帝国からトルコ共和国へとつながるトルコ人の日本人観の系譜である。そこには一つのステレオタイプ化した日本人像が見られるが、その形成に大いに貢献したと推測される2人の人物を取り上げ、彼らの著作からトルコ人の日本人に対するイメージをより明確に浮かび上がらせたい。

2. 親日観の伝道者アブデュルレシト・イブラヒム

オスマン帝国の版図を超えて、広くイスラム世界に親日観を広めたのがアブデュルレシト・イブラヒム(1857-1944)である。彼の著した日本旅行記『イスラム世界：日本におけるイスラムの普及』(Abdürreşid İbrahim, *Âlem-i İslâm ve Japonya'da İntişar-ı İslâmiyet*, Cilt.1, İstanbul, Ahmed Sâki Bey Matbaası, 1328 (1910))は、明治日本を訪れた非西欧人、キリスト教徒ではないムスリムの記録として史料的に高い価値を持つ²⁵。イブラヒムは出版に先駆けてイスタンブルの新聞紙上に旅行記の一部を寄稿しており、この本と共に多くの読者を得たことは間違いない。彼こそは「親日観」のイスラム世界への伝道者と言えよう。

アブデュルレシト・イブラヒム(1857-1944)は、タタール人のウラマー(イスラム法学者)であると同時に、政治活動家・思想家・ジャーナリストとしての顔も持ち、帝政ロシア支配下のムスリムの民族運動を指導した。1908年ユーラシアをめぐる大旅行に出発し、シベリアを經由してウラジオストクから海路日本に渡り、1909年2月から約5ヶ月間滞在した。この間、伊藤博文、大隈重信、犬養毅らと親交を持ち、「アジア主義」思想に影響を与える一方で、東京モスク建設計画の実現に奔走した。帰国後も日本のナショナリストとの交流は続き、息子を早稲田大学に留学させる。自身も1933年に再来日し、東京代々木モスクの初代イマーム(導師)となったが、太平洋戦争の最中日本で没し多磨墓地に眠っている²⁶。

『イスラム世界』では、イブラヒムが直接見聞した明治時代末の日本が活写されている。彼は庶民の生活・習慣から政治・司法・教育機関、産業、文化に至るまで幅広い関心を寄せている。一方で、伊藤や大隈といった当時の日本政界の大物たちと会っており、彼らと交わした会話についても克明に記録している。また、日本人のナショナリストや在日のインド人ムスリムらと協力して、わが国にイスラムを広めようとした活動の様子も窺い知ることができる。本書に書かれた日本・日本人の姿は、著者の直接の体験に基づくものであることから、オスマン帝国の人々に西欧経由の間接的な知識ではない、ムスリムの目を通した信頼できる情報と受け止められ、彼らの日本人観に多大

な影響を及ぼしたことは間違いない。イブラヒムの語る日本人とは以下のような人々である。

- 教育に熱心である
- 生来きわめて頑健で辛抱強い民族である
- 正直で清潔な民族である
- イスラムの道徳を生まれながらにそなえている

彼によれば、「大和魂（＝民族精神）」の護持こそ、日本人が西欧文明を受け入れながらも、それに流されることなく驚くべき発展を遂げた最大の要因である。以下『イスラム世界』から日本人観に関連する部分を引用する。

「日本では、教育はすべて母国語による。科学技術の専門書は完全に自分たちの言語に置き換えている。学校では外国語を右から左へ翻訳したような本は採用されない。教科書は本格的に自分たちの言葉で編纂している。」(220)

「日本に〔日露戦争の〕勝利をもたらしたものは、科学や技術だけではなく、日本人の愛国心と生来の忍耐力である。」(382)

「日本人はみな読み書きができ、近代科学のすべてを受け入れている。しかも今の水準から更に向上することが国民的な理想なのである。」(452)

「日本で最も注目すべき点は、6年間の初等教育が義務制であること、そしてその中の4年間は軍事教練が必須科目となっていることである。」(453)

ロシアの圧政に苦しむタタール出身のイブラヒムにとって、このような日本人は帝国主義列強の支配下にある全ムスリムの希望の星とみなされたようであり、

「日本の生死は東洋全体の生死でもある。日本の進歩と発展とは全東洋世界の願望であり、今日東洋人はみな己の生存を日本人の生存と一体のものと考えている」(381-382) という。そして、日本人がムスリムとなることを切望する。

「私は多くの理由から日本人はイスラムに改宗するにちがいないと確信した。第一に、日本人の習慣や道徳ならびに生活様式は見事にイスラムの慣行や道徳にかなっており、両者の間に基本的な相違は見られないからである。……第二に、日本人の民族精神は彼らのかけがえない財産である。総じて日本人はこれを誇りとし、その護持のためにはいかなる犠牲も惜しまない。……そして、そのための唯一の道はイスラムに改宗することである。……第三に、日本人はイスラムの受容によって政治的にも大きな利益を期待することができる。〔日本人がイスラムに改宗すれば、中国から東南アジアにかけての広大なイスラム市場を手に入れることができ、大陸・南方への進出に際しても現地ムスリムと連帯することができることから〕……このような政治的な目標が掲げられなければ、宗教の問題は日本人にとって何の意味も持たなくなってくる。日本人に形而上のことがらを納得させるのは所詮無理だからだ。……最初の段階ではイスラムという名前だけで十分なのである。日本人がたとえ形式であれ、我々はイスラムを受け入れたと発言しさえすれば、ヨーロッパ政界におけるムスリム問題の取扱は一変するに

ちがない」(454-456)と述べている。

3. 日露戦争の目撃者ペルテヴ・パシャ

先述のイブラヒムはタタール人であり生粋のオスマン人ではない。その意味においては、トルコ人の日本人観の正統な源流は、次に紹介するペルテヴ・パシャ（デミルハン）(1871-1964)の一連の著作であると言えるかもしれない。彼の『日露戦争の物質的・精神的教訓と日本人の勝利の原因』（Pertev Paşa, *Rus-Japon Harbinden Alınan Maddî, Manevî Dersler ve Japonların Esbab-ı Muzafferiyetleri*, Kanaat Kütüphanesi ve Matbaası, İstanbul, 1329 (1913)）は、日露戦争の実体験に基づいて書かれたものである。ペルテヴ・パシャは、オスマン帝国からトルコ共和国期にわたって活躍した軍人・政治家・戦史家である。日露戦争の際には観戦武官として旅順・奉天の戦場に在って、自ら戦闘の様子を見聞し負傷までしている。その報告書とも言える上記の書以外にも、日本滞在記を含む『わが生涯の思い出：日露戦争 1904-1905』（Pertev Paşa (Demirhan) *Hayatımın Hatıraları :Rus-Japon Harbi 1904-1905*, Cumhuriyet Matbaası, İstanbul, 1943), 『日本人の底力：日本はいかにして台頭したか』（*Japonların Asıl Kuvveti - Japonya niçin ve nasıl yükseldi?* -, Cumhuriyet Matbaası, İstanbul, 1. ed., 1937, 2.ed., 1942) など日本関係の著作を残した²⁷。

特に一番目に挙げたオスマン帝国期にオスマン語で書かれた本は、著者自身の日露戦争の体験に基づいて、物質的教訓として戦術や新兵器について述べ、精神的教訓として日本民族の優秀性を称えている。同書に見るペルテヴの日本人観は以下のように要約することができる。

- 死を恐れない勇敢な民族である
- 愛国心と自己犠牲の精神に満ちている
- もの静かで我慢強い。
- 名誉を重んじ、責任感が強い。武士道精神が生活に根を下ろしている
- 民族の道徳を守ることを何よりも重視している
- 教育に熱心である

彼の言葉に耳を傾けよう。

「日本人の願いとは何か？ それは祖国を何よりも神聖なものとし、国のためによるこんで命を投げ出すことである。」(3)

「温厚さと謙虚さ、その中での物静かな威厳は、日本民族全体の最大の長所の一つである。」(87)

「欧米からは単に自分たちに役立つものを取り入れ、文明の名の下にある多くの有害不要なものには目もくれない。」(92)

「精神の動揺を防ぐには道徳の確立が不可欠である。……日本人は民族の道徳を守ることを何よりも重視している。」(125-128)

「日本政府は、陸海軍備を十分に整えたと同時に、何よりも国民の精神力のおかげで、ロシアのようなヨーロッパの大国をあらゆるところで打ち破り……世界史上の新時代を築き上げ

た……我々の生きているこのヒジュラ [イスラム暦] 14 世紀は『アジアの世紀』であり、東洋民族の覚醒により、近い将来さらに多くの事件が世界を驚かすであろう。日本の勝利は、中国、イラン、エジプトを覚醒させ、熱狂させたように、わが国の自由と立憲制の実現にも影響を与えた。日本人が今日その道徳と勇気によって征服者の道を進んでいるように、かつてはオスマン人も道徳と勇気によって勝利へと突き進んだのである。……愛する祖国を内外の危機から救い出すことを望むならば、何よりもまず道徳と勇気に重点を置くべきである。……道徳と精神の乱れた民族は物質的進歩が最高度に達しても、常に滅亡が目前にある。……極東に出現した太陽は、近々我々にも同じ輝きで出現する。」(137-139)

ペルテヴの『日本人の底力：日本はいかにして台頭したか』は、トルコ共和国期にトルコの青少年のために近代化の手本として日本を紹介した本である。出版後ほどなくして第二次世界大戦が始まり、1942 年の第二版（改訂版）では大戦中の日本についても言及している。改訂版の内容は、1. 日本史概説、2. 明治時代、3. 第一次大戦後の日本、4. 現下の大戦における日本、5. トルコの若者たちへのメッセージ、となっている。そこにはオスマン帝国時代と変わらぬペルテヴの日本人の精神への賛同が見て取れる。

「日本民族はかつての美徳を、私が 36 年前に日露戦争で見た精神的な価値を完全に保持している。一つの民族において、精神の動揺を防ぐためには『道徳』が確固として健全なものでなくてはならない。」(79)

「民族は常に道徳のおかげで向上する。道徳を失うことによって没落、衰退していく。日本人はこれを確信するがゆえに、道徳の乱れを防止することをいまだに何よりも重視している。」(79)
「アングロ・サクソンは、自分たちの歴史の中で今日ほど危機的状況に置かれたことはなかった。そしてこの状況から救われるためには精神的、物質的に最大の努力と犠牲とを払わされるであろう。」(97)

おわりに

小論では、トルコ人の親日観の淵源が日露戦争にあること、そこにおいて醸成された日本人のイメージとはどのようなものであるのかということについてオスマン帝国で出版された日本関係の著作の言説から明らかにしようと試みた。最後にそれが現在まで殆ど変わることなく受け継がれている理由について若干の考察を試みたい。

これまで紹介したオスマン知識人の中でも、最も影響力があったとみなされる 3 人の日本人観をもう一度挙げてみよう。

1. ナームク・エクレムの日本人観

- 独自の文化的伝統、アイデンティティを保持している
- 知育よりもまず徳育に重点を置いている
- 真面目で勤勉

- 自らの資本で自らの手で近代化を成し遂げた
2. アブデュルレシト・イブラヒムの日本人観
 - 生来きわめて頑健で辛抱強い
 - 正直で清潔，生来イスラムの道徳を具えている
 - 教育熱心
 - 民族精神の護持
 3. ペルテヴ・パシャの日本人観
 - もの静かで我慢強い。
 - 名誉を重んじ，責任感が強い
 - 武士道精神が生活に根を下ろしている
 - 道徳を何よりも重視
 - 教育熱心

このように彼らの日本人観には驚くほど共通点が多い。オスマン帝国時代に始まり現在に至るまで通底するトルコ人のステレオタイプ化した日本人観は以下の3点に集約することができる。

- (1) 教育熱心
- (2) 道徳を重視し，勤勉・清潔・正直
- (3) 民族精神の護持

(1) の教育は近代化のためには不可欠な要素であり，愛国心は教育から醸成される。(2) はイスラムの教える美徳であり，ムスリムにとってこれを実践する民族こそが世界のリーダーとなるにふさわしい。(3) は日本人が近代西欧の技術やシステムを積極的に取り入れながら，自民族固有の伝統・慣習・文化を保持していること，つまり民族の「心」を見失わなわなかったことを示すものである。

6世紀余に及びオスマン帝国の国家・社会の根幹にあるイスラム文明と近代西欧文明との板挟みとなって苦しんだオスマン帝国の支配エリート・知識人にとって，日本が成し遂げた近代化は自らを鼓舞するものであったに違いない。そして，オスマン帝国の滅亡後に，トルコ人の国民国家を創造するという課題を背負ったトルコ共和国の政治エリートたちにとっても「日本モデル」は好適なものだった。彼らの思想は概ね「イスラム主義」と「民族主義」の2つの側面を持つが，過度な西欧化に批判的なイスラム主義者にとって，日本人は非西欧，非キリスト教文明世界の側に位置し，イスラム的道徳と重なる伝統的価値観を保ちながら近代化に成功した。すなわちイスラムは近代化の妨げとなるという親西欧派の主張は誤りであることを日本の事例は証明したことになる。一方，トルコ民族主義者にとっては，日本人は同じアジアの民族であり，西欧化を進めながらも「民族精神」を失わず，愛国心が強く，国策に忠実で，勤勉であるが故に欧米先進国に肩を並べ，今や彼らを凌駕するほどである。したがって「日本モデル」を手本とすれば，トルコもまた中東の「日本」と成り得るのである。

[注]

- 1 『ザマン (Zaman)』紙、2011年7月3日付け紙面より。アンケートは、アダナ、アンカラ、アンタルヤ、ブルサ、ディヤルバクル、エルズルム、イスタンブル、イズミル、コンヤ、サムスン、ゾングルダクで1000人への対面調査で行われた。
- 2 イラン・イラク戦争中の1985年3月17日、イラクの大統領サダム・フセインが、48時間後にイラン上空を「航空禁止区域」に指定し、以後は無差別攻撃をすると宣言した。各国の航空会社が自国民を乗せてイランから脱出させる中、日本航空は安全の保障が無い限り飛行できないと断ったため、多くの邦人がテヘラン空港に取り残された。日本政府とトルコ政府との外交交渉の結果、トルコ航空がテヘランに飛び200余名の日本人を救出した。
- 3 山田寅次郎『トルコ画観』博文館1911。
- 4 長場紘『近代トルコ見聞録』慶応義塾出版会2000、73-74頁（山田寅次郎、前掲書11-12頁）。
- 5 徳富健次郎『巡礼紀行』警醒社1906（『蘆花全集』7、新潮社1929所収）。
- 6 長場紘、前掲書、160頁。
- 7 大阪商業会議所会頭として日本の中東貿易の振興に先導的役割を果たした。稲畑については、池井優・坂本勉編『近代日本とトルコ世界』慶応義塾出版会1999参照。
- 8 上村辰巳「最近の土耳其」（『大商月報』252号、1928年4月）2-3頁。
- 9 E.Z.Karal, *Osmanlı Tarihi*, Vol. 8, Türk Tarih Kurumu Basımevi, Ankara, 1962, p. 547.
- 10 B.Lewis, *The Emergence of Modern Turkey*, Oxford University Press, London, Oxford, NewYork, 1968, pp. 206-207.
- 11 Tadahisa Takahashi, “Türk-Japon Münasebetlerine Kısa Bir Bakış 1871-1945”, *Türk Dünyası Araştırmaları*, Ankara, 1982, pp. 136-137.
- 12 Y. H. Bayur, *Türk İnkılab Tarihi*, II Kısım V, Türk Tarih Kurumu Basımevi, Ankara, 1952.
- 13 Feroz Ahmad, *The Young Turks*, Oxford University Press, Oxford, 1969, p. 23.
- 14 Ziya Gökalp, *Türkçülüğünün Esasları*, İstanbul, 1976, pp. 60-61.
- 15 Halide Edip, *Memoir*, London, 1926.
- 16 Mehmed Âkif Ersoy (1873-1936), トルコ共和国の国歌『独立行進曲』の作詞者。
- 17 Abdürreşid İbrahim, *Âlem-i İslâm*, p. 202.
- 18 B.Lewis, *The Middle East and the West*, Bloomington, 1964, p. 55.
- 19 杉田英明『日本人の中東発見：逆遠近法のなかの比較文化史』東京大学出版会1995、189頁。
- 20 出版年はイスラム暦。（ ）内は西暦。
- 21 本書の内容は現代トルコ語訳参照（Mustafa bin Mustafa, Ahmet Uçar (ed.), *Bir Osmanlı Bürokratının Uzakdoğu Seyahati*, Çamlıca Basım Yayın, İstanbul, 2010）。
- 22 1871年の「学事奨励ニ関スル被仰出書」のことであろう。
- 23 青年トルコ人と日本については、R. Worringer, *Ottomans Imagining Japan: East, Middle East, and Non-Western Modernity at the Turn of the Twentieth Century*, Palgrave Macmillan, New York, 2014参照。
- 24 マーリー暦（オスマン帝国の財務暦）。
- 25 同書の日本に関する部分は日本語に翻訳されている。アブデュルレシト・イブラヒム（小松香織・小松久男訳）『ジャポニヤーイブラヒムの明治日本探訪記』岩波書店2013。
- 26 アブデュルレシト・イブラヒムの生涯については小松久男『イブラヒム、日本への旅—ロシア・オスマン帝国・日本—』刀水書房2008参照）。
- 27 ペルテヴ・パシャについては、小松香織「近代トルコにおける軍人のエトス」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』No. 27, 2017, pp. 17-31頁、横井敏秀「あるトルコ軍人の日本論（1）—日露戦争観戦武官ペルテヴ・パシャのみた日本—」『国際教養学部紀要』Vol. 4, 2008, 165-174頁
Dündar, A. Merthan, “Pertev Demirhan ve Rus-Japon Harbinden Alınan Maddi ve Manevi Dersler Adlı Eseri Üzerine”, Esenbel, S. and Küçükyalçın, E. (ed.), *Türkiye’de Japonya Çalışmaları Konferansı I*, Boğaziçi Üniversitesi Yayınları, İstanbul, 2012, pp. 299-314参照。